
眠らない男

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠らない男

【Nコード】

N2979F

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

郊外の町田に住まいを構え、新宿の小さな設計会社に勤めて、はや三十年になる中年サラリーマン・米林。日頃、通勤に利用している電車の中で、彼は眠ったふりをしたまま、様々な事を思い浮かべてしまう：

都心から急行に揺られて約四十分、米林は町田に住まいを構えていた。新宿の小さな設計会社に勤めてはや三十年。平日はほとんど家と会社とを行き来する、みな他のサラリーマンと同じ無機質な味気ない毎日を送っている。

「孝子、じゃあ俺は今日も行ってくるよ」

「いつてらっしゃい。気をつけてね、あなた」

いつもと変わらぬ朝。いつもと変わらぬ、妻の私に対する配慮。

（平凡が一番さ、平凡が）

そう、米林はいつも自分に言い聞かせつつ、なだらかな郊外のニュータウンの丘をゆっくりと下ってゆく。昨日と同じく、雀が朝を迎えたことを告げるが如く至るところで囀り、黄色い鞆をややぎこちなさそうに背負った低学年の小学生達が幾人かで固まって喋りながら私とすれ違う。

（今日もコイツはちゃんと入ってるな）

と、毎朝孝子が作ってくれる愛妻弁当を、バッグの中に手を入れて確かめる。（よしっ、今日も行こうか）

駅に近づくにつれ、米林の足取りは軽くなつてゆくのであった。都心へ向かうため、地味なスーツをきりっと纏った大勢のサラリーマン達。平日の朝の町田駅はいつも彼らなくしては有り得ない。駅のホームでは、みな路傍の石のように無表情で、目の前のどこか空虚の一点を見つめているようでもある。米林も何を隠そう、実はそんな彼らの内の一人であった。やがて上りの電車がホームに入ってきて、喇叭らっばのような鈍く乾いた音を一瞬立てて停まる。ドアが開くと同時に、見ず知らずの群集は、相変わらずロボットのような無表情のまま次々と車内に乗り込んでゆく。

（おお、今日は座れるかもしれない）

米林は朝の通勤ラッシュ時、座席に腰掛けられる時は、コクリコ

クリ頭を少し横に傾けて眠ったふりをしている。鈍行電車ではゆっくりと落ち着いて行ける時も多いのである。（君達の多くは、たぶん降りるまで立ちっぱなしか。まあ、頑張れよ）

眼の前の吊り革に手をぶら下げて突っ立っている、自分と同じく額に脂汗の滲みやすい中年達に、米林は胸裏でくだらない皮肉のエールを送る。徐々に左右のドアの隅から隅まで中年おやじ達の醜い身体が不揃いに苦しく寄せ合ってくる姿は、端から見ただけでも無様である。

“う、……ううウ”

と、車内のあちこちで微かに息が途切れる音が聞こえたりするものである。もう嫌というほど見慣れているが、何気なくそんな彼等を見上げるだけでも息苦しさはもちろん、一種の遣る瀬なささえ感じてしまう自分がいる。

中堅サラリーマン達の群れに紛れて、学生らしき男女も疎らに見かける。澄ましたポーカーフェイスで、洋楽を大音量でシャカシャカと聴いている仕草を見ると、米林は無意識のうちに眼を細め、

（俺ん家の悟彦も、ああやって済まし顔で吊り革に立って窓越しに外を眺めているのかなあ）

と息子の事がふいに脳裏に浮かびあがってくる。

隣には二十代半ばくらいのOLらしき女が、また横には、私とほぼ同じ恰好をした、中肉中背で額の広く禿げあがった脂性の男が、やや猫背気味でスポーツ新聞を片手にして、気怠そうに活字を眼で追っている。

（ああ、何ていい匂いがするんだろう）

すぐ隣の若い女の甘い香水に誘われ、米林の表情は思わずニヤリとしてしまう。

（まったく、ばさばさと新聞なんか折り広げ眺めやがって）

額まで髪の毛があがった中年を蔑むかのように、一瞥して彼は不機嫌に顔を逸らす。自分と似た男と、すぐ横でこうやって出合ってしまう事に自身もう飽きたのか、今日一日の疲れをもう予想してか、

溜息を洩らした後、腕組みをして彼は再び瞼を閉じて眠ったふりをする。鈍行電車もガタツゴトツ、ガタツゴトツ：と相変わらず乾いた無機質な機械音を立てて街へ街へと駛^{はし}っている。

（平凡が一番さ、平凡が：）

米林はまた、お決まりのフレーズを自身に聞かせつつ、頭だけをコクリコクリと微妙に動かす。

「次は登戸、登戸に停まります」

（まだまだ取り敢えず、寛いでいられるな）

世間ではいつもと変わらぬ憂鬱な月曜日が始まろうとしているのに、米林は少し呑気な気分でもあった。

（二十四時間前に逆戻りできればなあ、また今頃は：）

そう、昨日の日曜日、米林は早朝にペットのコリーを散歩に連れていった後、久しぶりに愛車のシビックで湾岸線をかつ飛ばしてきたのであった。穏やかな晴天に恵まれ、パワーウインドウに差し込む陽光を存分に浴びながら、一人ドライブを満喫した。日頃、会社でのストレスも溜まっていたのでリフレッシュには最適であった。

（昨日は本当に爽快だったよなあ。それに比べると今はもう：）

うって変わって週明け最初の一ページは、気怠く億劫な雰囲気に包まれている。日曜の夕方辺りから襲ってくるどうしようもない脱力感は今も昔も変わらないし、私だけの事ではないであろう。

（違うんだ。昔の俺と今の俺とでは：）

米林は十年前から課長としての地位に就いたが、部下との仕事上においてのコミュニケーションが毎回の事ながら億劫に感じられてくる。

建築設計という昨今、耐震偽装などと大きな社会問題としてクローズアップされている中で、やはりこの私が行っている仕事は、幾年と歳月を重ねても決して気が抜けないのである。ほんの少しのミスが、私どものような者が勤めている下請け会社にとっては、まさに致命的な結末へと発展しかねないのである。（あいつがもう少し上手く、立ち回ってくればなあ）

今日もまた部下の藤竹が、取引先でヘマな事をしないか心配にな
ってくる。彼は最近、営業に配属されたばかりなのである。

（そうだなあ。営業には境を同行させるか。古出建築とは重要案
件も多いし）

相変わらず頭をコクリコクリさせながら、また時折身体を後ろに
反らして、米林は週明けの今日を、まずどうしたら上手く切り抜け
られるだろうかと思案を巡らしていた。（それから宮内には、先
週完成した新築アパートの図面を渡しに行ってもらうか）

さらに深く腕組みをしながら、彼は額を少し脂汗で滲ませた。

（おや、また隣の女の子だな）

眠ったふりをしている米林の前を、スーッと甘い香りが顔を掠める。
ふと視線を彼女のほうに向けた瞬間に、OLらしきその女は座席か
ら離れていった。そしてもう一人、私の横にいた自分と体型の似た
中年の禿げ頭の男は、いつの間にかいなくなっていた。

「まもなく下北沢、下北沢に到着致します」

電車は都心に近づくにつれ、不特定多数の老若男女の見苦しい塊
は益々酷くなる。

（こんな状況の中でも俺は今座れているんだ。ラッキーな男だね）
会社の事を考えながらも、今はどっしりと楽に座れて出勤できて
いると思うと、ただそれだけで、米林はくだらない優越感に浸り、
ニヤリと薄嗤い^{かお}を表情に作ってしまうのであった。首をちよいと横
に反らすと、窓越しに見えるのは、都内の密集した住宅街やビルの
数々である。

そしてやっと、ガタッゴトツガタッゴトツ：と規則正しいリズム
を刻んで駛ってきた鈍行電車は、朝陽を浴びている大都会・新宿の
街へと入ってきた。

「ご乗車ありがとうございます。まもなく終点・新宿、新宿で
す」

そう、車掌のアナウンスが義務的な声で流れると、ぎゅうぎゅう
詰めの大勢の群れの中から、やっとこのラッシュから解放されると

いう合図^{サイン}みたいに、あちこちで微かに吐息を洩らすのが聞こえる。

（もう少し。もう少しの辛抱さ：）

人いきれの激しいなか、身体と身体をやむを得ず寄せ合っている群集をいたわるように、米林も心頭で声を掛ける。電車が駅のホームへゆっくり入り、降りる間近になると、米林も本当に眠りから覚めたような気怠い表情で周りを見回した。

電車は止まり自動ドアが開くと、大勢のサラリーマン達は、相変わらず路傍の石のように表情も無く、ロボットのような早い足取りで、駅の改札口へと向かってゆく。

（さあて、俺も行くとするか。平凡が一番だな、平凡が：）

米林もまた、お決まりのフレーズを自身に聞かせつつ、駅の改札口へと忙しなく向かった。そして、いつもと変わらぬであろう今日を唇と心で噛み締めて、朝の新宿の街を歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2979f/>

眠らない男

2010年11月16日18時46分発行